月が鏡になればよい

麻戸　槊來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月が鏡になればよい

【Ｎコード】
Ｎ４７７９Ｖ

【作者名】
麻戸　槊來

【あらすじ】
愛さなければよかった…こんなに身勝手なあなたの事なんて。遠距離恋愛の末、やっと会えると思ったのに、あなたの口から出てきたのは、別れのことばだった。―――望んでこんなに好きになった訳ではないのに、あなたは私を置いて行くのね。
※新しくその後の話を一話掲載しましたので、よければお付き合いください。

逢わぬ昔にして返せ（前書き）

都々逸（どどいつ）「遠くはなれて会いたい時は月が鏡になればよい」（一休禅師）より

逢わぬ昔にして返せ

愛さなければよかった…。
こんなに身勝手なあなたの事なんて。

遠距離恋愛だということも辛いのに、お互いに忙しくて。前回だって久しぶりに
会えたと思ったら、たったの一日で仕事に戻るし。
ねぇ、分かってる？
もう、一年以上まともに会っていないんだよ？
私だって言いたくないのに「私と仕事、どっちが大事なの？」なんて、
月並みなことばが浮かんでしまう。

たとえ私との時間をつくるために忙しいのだとしても、やっぱりどうしても
淋しいよ。

こんな状態でも、また再び、あなたに逢えると信じているから頑張って
居られるのに…。
無理して待っている間に、どうして笑っているのか分からなくなりそうよ。

――――だって頬が引きつるのが分かるのよ。
人がいなくなった途端に、顔から表情が消えるのよ。

それでも、みんなに心配をかけさせたと知ったら、あなたは怒るのでしょう？
だから私は、笑うのよ。

本当にひどい人だと思うの。
こんなに待たせて
こんなに想わせて
こんなにも好きにさせたくせに

久しぶりに会えた私を見た途端、
俺の事は忘れろ、なんてどの口が言うのかしら
「ふざけるな！」って、こういう時に言うのよね。

ほら、今すぐ戻ってきて抱きしめてくれたら
許してやらない事もないから

この涙の理由は聞かないで…。

そっちの世界でも、
今日出せなかった婚姻届は有効ですか？

（あなたの家族に、なりたかった…。）

逢わぬ昔にして返せ（後書き）

いとも簡単に、あなたを奪った事故は憎くないけれど。
たやすく私を手放した…
あなたが、憎くて憎くてたまらない。

都々逸「切れてくれなら切れてもやろう　逢わぬ昔にして返せ」（詠み人しらず）

人目しのんで見る写真

『本当に、馬鹿で真面目でお人よしで、どうしようもない人だったけど
私にとったら、愛しくてしょうがなかったんですよ』
そう微笑んだ人の顔が、まぶたに焼き付いて消えなかった。

？　？　？　？　？　？　？

「もう本当にさぁ～、美人で優しくていい女なんだよ」

なんで俺は、縁もゆかりもないこんな人間の話を延々と聞かされなければ
いけないのだろう。

昨日、交差点でたまたま会った幽霊と目を合わせてしまったことが悪いのは

分かっているが、どうしても諦めきれない。
幽霊を見るのなんていつもの事なのだが、つい珍しい姿に目を止めてしまったのだ。
けれどあれから、この男にずっと惚気を聞かされていたら嫌にもなるだろう。いい
加減に辟易してきた俺の耳に、急にまじめになった男の言葉が入ってきたことで気が
変わった。

「でさ、申し訳ないんだけど…。
明日、赤い目をした美人に会ったら、怒鳴られるのを覚悟でいってやってくれよ。
あんたを捕まえ損ねた男は、この世でいちばんどころかあの世でさえも一番幸せ
だったんだって。
…だからもう、そんなに重いからだ引き摺って、墓なんかに行くなよって。
大体あんたに惚れたその男は、いつまでも未練たらしく、あんたの傍にいるから
意味ねーってさ」

———そうまでしてくれる彼女がいとしくて愛しくて
でも、今すぐ抱きしめられないのが、もどかしくて堪らないんだよ。

これまで、能天気に惚気ていた男とは思えないほど、こいつは切なげにつぶやいた。

『なんでお前の恋人に俺が会いに行かなきゃいけないんだと』文句を言う事が出来なかった。今まで、幽霊の願いなんて聞いていたらきりがないと、見て見ぬふりをするのが当たり前だったのに…。

「な？頼むよ。
あいつ体調が悪くても、子どものようす知らせに来るんだよ」

…ただでさえ昨日見た、幸せそうなこいつと花を持った妊婦さんの姿を、忘れられないのに、そんな風に言われて断れるわけがないだろう。

「～ッわかったよ！明日でいいんだな？」

「ッお！行ってくれるのか、ありがとな。ただし…」

？　？　？　？　？　？　？　？

「――――それから、俺の子供をよろしく頼む。との事でした」

話し終わると、彼女はゆっくりと瞳を開いた。
『貴方の死んだ恋人が、伝えたい事があるそうですと』何ともひねりのない、
怪しげなことを言う俺の話を、彼女は最後まで静かに聞いてくれた。

「そんな怪しげな言葉、詐欺師だって言わないと」彼女の隣に座っている幽霊は
言うが、疑っていたのは最初だけで、考えていたよりすんなり彼女は受け入れて
くれた。

実際、俺自身もそんな言葉を信じて大丈夫なのかと思ったが、若干なら彼女も
幽霊の気配を感じる事が出来るらしい。

どこか恋人が一緒にいる気がしたのだという。あいつの言葉を伝え終わり、俺は
二人と別れた。彼女は昨日すれ違った時とは違い、まるで花が咲くような笑顔を
見せてくれた。

『行ってくれるのか、ありがとな。ただし、俺の彼女に惚れるなよ』

笑顔見た瞬間、思わずあいつに言われた言葉が頭をよぎる。
――――けれど、どんなに頑張ろうと俺の気持ちが報われる事はない

だろうな…。

あんなに幸せそうな、愛しそうな顔をして、あいつを貶(けな)していた彼女の心を
奪える自信が俺にはなかった。

きっとあいつに似た子供と一緒に、彼女はこれから歩んでいくのだろう。

人目しのんで見る写真（後書き）

「忘れろと」言った舌の根も乾かぬうちに、君の傍に張り付いて
他の男を牽制する馬鹿な俺を許してくれる
君が愛しくて恋しくてしょうがない

都々逸「口でけなして心でほめて　人目しのんで見る写真」（詠み人知らず）

『その後』の内容はタイトルとはイメージが違うと思いますので、ぜひ見てみてください。あれも都々逸なんですが、何気に一番気に入っています。
――――私は、作品内で主人公に心変わりさせませんよ…。
この台詞で、分かってもらえますか？

お約束だけ出来ぬ人（前書き）

一応、この話を投稿したのは、「その後」の後になります。彼女目線です。『…何時でも強い訳じゃない』がテーマです。

お約束だけ出来ぬ人

―――まだ、体があなたを覚えている

目が覚めて起き上がると、夢の中でも泣いていた事に気づく。
眠くて視界がぼやけているわけではなくて、頬を涙が流れていったのを感じた
のだ。私は、昨日さんざん泣いたというのに、まだ足りなかったらしい。
…何がそんなに悲しかったのだろう？寝るまえの記憶が曖昧で、頬が痛みだすほど
泣いた理由を思い出せないでいた。

それにしても、どうして私はこんな真っ白い部屋で寝かされているのだろうか？
見るからに、ここは病院の一室のようだが…。
確か昨日は彼の両親から連絡が来て、病院に向かった。
そう、今日は丸一日休みを取れたと誇らしげに言ってきたくせに、

約束を破って
彼は仕事に出かけて言ったのだ。それに拗ねた私は不貞寝して…。
いい訳をさせて
もらうと、前日の夜にさんざん彼が無茶をしてくれたせいで、寝た
のは夜明け近く
になり、眠くて仕方がなかったのだ。

きっと何時もと同じで、申し訳なさそうに甘い物でも買ってくるだ
ろうと考えて
いたから、私はそれまで寝ているつもりだった。けれど何時までた
っても彼は
帰って来ず私を起こしたのは聞きなれた彼の声ではなく、電話のけ
たたましい音
だった――――。

嗚呼、そうだ。
「彼は死んだと」みんなが言うのだ。

そんな冗談を言って何が楽しいのか分からなかったけれど、私は彼
に会うために
目が覚めてまたすぐ病院に急いだ。

本当は、昨日の時点で彼を連れて帰ろうとしたのに、腕を引っ張ろ
うとする私を
みんなが止めるのだ。早くしないと、市役所が締まって結婚届けを
出せなくなって
しまうのに…あまりにもつらそうな顔でみんなが止めるから、私は

届けを出すのを
引き延ばすことにした。
その上、昨日は彼を連れて帰るどころか「一度休みなさいと」言って、彼の両親に
私だけ家に帰されてしまった。しかし、さすがに今日には届けを出したい。

そうじゃないと式などの関係で、もっと先送りする事になるだろう。
本当は私一人
で出してくると言ったのに、「一生の思い出なのだから、一緒に行きたいと」忙し
いくせに彼が駄々をこねたからこんな事になっているんだ。
この為に、せっかく彼も無理して休みをもぎ取ったのに、それが引き延ばされる
のは耐えられない。

———そう思って病院に着いた途端、彼を探したけれど、みんな落ち着けと言って
なかなか彼に会わそうとしないのだ。

まるで私だけ仲間外れにされたようで、とても不愉快だった。
どうして自分の婚約者に会うのに、こんなにもいろいろ言われなければいけないの
だろう。

大体、昨日はおかしな夢を見たから彼に一番に聞かせようと朝から考えていたの
だ。彼が事故にあって、「俺の事を忘れて、しあわせになれと」似

合わない格好い
いセリフを言う夢を見た。あんなにもリアルな夢を見たのは初めてで、すぐ彼に
話したくてしょうがなかった。早くいつものように『そんな夢をみるなんて、馬鹿
だなぁと』言って笑い飛ばしてほしかった。

…そうだ、思い出した。
それなのに、病院でわたしを迎えたのは冷たく何も話さない彼だったんだ。

――――アレは、ほんとのことなの？

確か、彼の冷たい体に触れた途端、私は病院で倒れてしまったのだ。
まだ、彼が死んだという事を認められたわけではないのに、涙だけは出るのだから
不思議だ。気分的には、今にもひょっこり扉を開けて現れるのではないかと感じて
いるのに…。
彼が大っきらいな、薬品くさい病院に寝かされているところを見ても実感なんて
湧かなかった。むしろ、３９度近く熱が上がっても「病院になんて行きたくないと」
言っていたのに、よく黙って寝ているなぁと、はじめ見たときは感心したのだ。

――けれど、流石に二度も冷たくなった彼を見ればわかってしまった。
いまだに、昨日まで一緒だった彼の体温を思い出せるけど。
服を脱げば、私の体には彼の付けた痕が残っているだろうけど。

彼は死んでしまったのだ。

お約束だけ出来ぬ人（後書き）

必死に目を閉じ、耳を塞いでみたけれど…
みんなが正論を言って苦しめるから
とうとう私は、貴方の不在を認めてしまった

都々逸「小唄どどいつ　なんでもできて　お約束だけ　出来ぬ人」
（詠み人知らず）より

諦めましたよ

俺の奥さんは、最近独り言が多くなった。
さすがに、外では「やめておけと」思うのだが、まだそれを伝えた事はない。

彼女はずいぶん成長した息子を両親に預け、近頃仕事に復帰した。
幸い、育児休暇なども充実している職場だったため、復帰自体には別段支障は
なかったらしいのだが、やはり子育てとの両立は大変らしく独り言のほとんどが
俺に対する愚痴だ。

それは俺の両親と会う時にも発揮され、俺の母親と仲良くやってくれるのは
ありがたいが、話のネタはもっぱら俺に対する愚痴なのは頂けない。
特に俺の母親など「親不幸な息子に貴女のような素敵な人はもったいない」と、
まるで彼女の親を代弁するようなことを平気で口にするのだからたまったもの
ではない。…だが、俺としても親不幸な事をしてしまったと自覚している分、
黙って聞いてる他ないのは情けないところだ。

息子も1歳になり、ずいぶんしっかりしてきた。
彼女が息子の名前を「隆司（りゅうじ）」にしたと言ってきた時は、俺の名前と同じ漢字を

使うなんて、可愛い事をしてくれるじゃねーかと喜んだものだが、
すぐさま、
漢字が気に入っただけだと言われたのには少しへこんだ。

———いくら傍で息子の成長や妻の生活を見守っていると言っても、
俺には二人を
抱きしめてやる事は出来ない。
あいつは幽霊(おれ)の存在をうっすら感じるだけで、どこにいてどんな顔
を俺がしているか
すら分かっていないのだ。こんな事なら、せめて籍だけでももっと
早くに入れてお
けばよかったと後悔したが、それさえもあいつを縛る事にしかなら
ない気がする。

俺が死んだ当日にあいつと籍を入れようとしていたため、あいつは
正式には俺の
妻ではない。だから、あんなにもしょっちゅう俺の両親に子どもの
顔を見せに
行く義理もないし、いい奴を見つけて新しい人生を歩むことだって
本当は出来る
筈だ。

…けれど、俺が死んだあと妊娠が発覚したあいつは、初めて子供が
出来たという
事実に怯えることなく、一人で育てていくと俺の仏壇の前で誓って
くれた。この時
ほど、あいつの強さと優しさを実感した事はないかもしれない。

それと同時に、あいつの脆さを垣間見ることになった。妊娠が分かった後、彼女は
自分の両親とだいぶもめており、「どうしてもこの子を一人で育てたいから協力し
てくれと」電話しながら泣いていた。

何故、俺が幸せにするはずだった彼女の姿を傍で見ている事しか出来ないのだろ
う…。こんなにも頑張っている姿を見ると、さすがに申し訳なくて涙が出た。

以前に、俺の声を聞ける人間に会った事がある。
その人間に頼み、一番言わなければいけないと思っていた事を伝えてもらった事が
あった、どうしても『何もそこまで無理する事はないんだ』と伝えたかったのだ。

だが、きっと彼女は夢の中で「俺のことは忘れてくれと」言ったことやその言葉が
ただの強がりであり、本心ではない事を知っていたのだろう…。
彼に会ってもらったその日の夜中に、「私が子どもの父親役も母親役もやってみせ
るから安心しろと」言って一人泣きながら笑っていたのには、彼女の幸せだけを
願えない自分が情けなくてしょうがなかった。

…お前は「泣くのはきらいだと」いつも笑っていたのに。
俺の事でそんな顔をしてくれるなんて、想ってくれているなんて知らなかった。

思えば、明るいと言われていた俺のマイナス面を理解し、支えてくれたのは彼女
だけだった。そんな彼女だから、俺の格好つけた虚勢などすべてお見通しだったの
だろう。

――――もう、自分に正直になってもいいだろうか？
四十五日が過ぎて、成仏しようとした俺を引き留めた心残りは、子どもの事だった。
せっかく生まれた隆司が、体が小さくこちら側の世界に来ようとしたのを阻止した
後は、もう少し隆司が大きくなるまで見守りたいと考えた。

けれど、どれだけ理由付けをしても、結局俺が家族のもとを離れたくないのだ。
ベビーベッドで一人遊んでいる隆司をみつめ、その想いはより強くなった気がする。
あと少し、あと少しだけ…。

「俺にお前の父親面させてくれるか？」

そう問いかけた俺に、目の見えないはずの隆司が俺を見つめ、笑いかけてくれた。

諦めましたよ（後書き）

ずうずうしくも、その瞬間に
確かに俺の子どもなんだと実感する事が出来て…涙が出た

都々逸「諦めましたよ、どう諦めた　諦めきれぬと諦めた」（都々一坊房歌）より

お前の母さんも、お前の事も
愛おしくて、抱きしめたくてたまらないよ

多分これで作者自身、満足できたと思います。
この家族はずっとこれからも生きて行き、幾らでも未来は続いているので、これで終わりと区切るのは私には難しいです…。
もしかしたら、またこの家族の一場面が浮かび続きを書いてしまうかもしれませんが、その時はお許しください。

この作品にお付き合いいただき、ありがとうございました。

胸に伝わるぬくもり（前書き）

都々逸「胸に伝わるぬくもり嬉し　腕の重みがいとおしい」（詠み人しらず）

胸に伝わるぬくもり

『おーい！隆司が泣いてるんだけど』

おろおろと何をする事も出来ずに、ベビーベッドの横をうろつく。こんな時にどうすればいいのか全く分からない俺は、本当に情けないと思う。
普段、仕事で忙しい彼女の手助けを少しでも出来たらいいのだが、今の俺では
それも望めない。

『なんだ？飯か、おむつか？
ちゃんと訴えないと、ママは分かってくれないぞ』

結局、妻任せなのだから大概俺もどうしようもない。今日は町内会の旅行だとか
で、同居している妻の両親はいない。その為、自然と隆司の面倒をみられる存在
は限られているのだが…。

『うわぁー！おい、隆司が横向いて口からミルク吹いているけどいいのか！？
まさか病気か？病気なのか！』

泣いている隆司と一緒になって騒がしい俺に気付いたのだろうか。
トイレに入っていた彼女が急いで出てきた。

「あらあら、ミルク戻しちゃったの？
さっきゲップさせるのが足りなかったのかな…」

よいしょっといいながら、彼女が隆司を抱きあげた。ぽんぽんと彼女に背中を叩かれると、隆司はケプッと可愛らしいゲップをした。幸い、枕元に敷いていたタオル以外にミルクは付かなかったようだ。

『うわぁ。うちの隆司はゲップまで可愛いな。
これは、将来子役デビューか？』

デレデレと顔を崩しながら隆司の顔を覗き込む。
母親が戻って来て安心したのだろう、さっそく我が息子は寝る体勢に入っている。
うん、これは絶対に大物になる。

「隆司お願だから、前みたいに背中にミルク掛けないでよ～」

すやすやと気もち良さそうな息子に対し、妻は現実的だ。
確かに、体がまだまだ発達していない息子はミルクを戻すのも珍しくはない。
だが、それも可愛い息子がする事だ。少しくらい大目に見てやって欲しい。

「あれ？もう寝てる…。親子そろって暢気なんだから」

———藪蛇だったらしい。
隆司を寝かせるために、彼女は子守唄を歌い出した。背中をたたくリズムと声が揃って心地いい。暖かな昼過ぎに、慈愛に満ちたその姿は「幸せ」を絵にでも描いて切り取ったようだ。『生きているときに、この景色の一部になりたかったと』幸せなのに涙が出た。

彼女と息子の穏やかな表情が見られる此処は、どんな場所にも負けない天国であろう。

胸に伝わるぬくもり（後書き）

彼女には彼の存在は何となく感じられるだけで、見る事も声を聞く事も出来ていません。霊という形で現世にとどまっている彼は、否定されてもしょうがないと知っているので、苦々しさを何時も感じています。…たぶん（汗：基本が能天気なので）。

ただ、マイナス的な未練や想いで家族のもとに残っているのではないと、感じてくださると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4779v/

月が鏡になればよい

2011年11月28日05時50分発行